

## おじいちゃんとのふれあい

矢野 汰一

僕の住んでいる家の近くには、昔、一人ぐらしをしているおじいちゃんがありました。そのおじいちゃんは、生まれつき耳が聞こえないそうでした。小さい頃は、そのおじいちゃんに挨拶をしても返事が返って来ないことを不思議に思っていました。そして、おじいちゃんは近寄りにくい人だと思っていて、少し怖がっていました。

それからしばらくして、おじいちゃんが耳の聞こえない人だということを知りました。それから、おじいちゃんの家にお邪魔する機会がありました。おじいちゃんは、今まで僕が持っていたイメージとは違い、誰にでも優しく、気配りのできるとてもいい人でした。それから僕とおじいちゃんは、どんどん仲良くなりました。僕とおじいちゃんは、オセロやトランプ、将棋などをして遊んでいました。僕は手話が出来ないので、紙に文字を書いて言葉を伝えていました。

僕がこの体験から感じたことは、障がいを持っている人と持っていない人とでもコミュニケーションをとることができるということでした。僕は、おじいちゃんと知り合う前は、障がいを持っている人は、人とコミュニケーションをとることが難しく、自然と人と関わる機会が少なくなっているのではないかな、というイメージを持っていて、そのせいで、障がいのある人は関わりにくい人と思っていました。でも、おじいちゃんとお会いしてからは、それが自分の勘違いだったと分かりました。なので、おじいちゃんとの出会いは、とても貴重なものだったと感じています。

そして、僕がもう少し大きくなった時に、おじいちゃんが病気になりました。その頃僕は、学校でいそがしくて、おじいちゃん与会ったり、遊んだりする機会が、どんどん少なくなってしまっていました。おじいちゃんとは、長い間会っていなかったのにお見舞いに行った時は、とても緊張しました。でも、おじいちゃんは、長い間会っていなかったのに、とても優しいままでした。おじいちゃんは、その後も僕と遊んでくれました。

おじいちゃんは、一年ほど前に亡くなってしまいましたが、僕が今まで生きてきた中で、おじいちゃんといっしょに過ごした時間は、とても貴重で、とても大切なことを教えてくれました。それは、障がいのある人とない人でも十分にコミュニケーションをとることができるし、お互いのことを知って、分かり合うことができるということです。僕がおじいちゃんといっしょに過ごした時間は、とても充実していて、楽しかったです。おじいちゃんは障がいを持っていましたが、人に優しく接することができる人でした。なので、障がいの有無に関わらず、優しい人もそうでない人もいると分かりました。僕がおじいちゃんといっしょに過ごして分かったことは、障がいのある人に対しては、優しく接することが大切で、大事にしないといけないと思いました。

僕がここから学んだのは、障がいの有無に関わらず、こちらが心を開いて接すれば、相手も心を開いてくれるということです。このような考えを持って、人と接することができたなら、きっと障がいについて理解して、障がいを持っている人と心からつながることができる

のではないかと思いました。僕は、今回学んだことを活かして、障がいを持っている人も持っていない人も同じようにくらすことのできる社会をつくることのできる人になりたいと思います。